

広島県三次市の 地域活性化政策によるワイナリーの役割と観光振興

富 川 久 美 子

(受付 2015年 5 月 1 日)

1. は じ め に

日本の多くの地域では、過疎化と高齢化の課題を抱え、その解決策の一つとして観光による地域振興が推進されている。特に近年では、住民が中心となった活動が奨励され、その成果が来訪者数と消費額を指標として評価されることが多い。そのため、一時的な成果主義や住民の負担が問題となり、長期的な観光効果を上げられない事例が依然として多く見られる。その一方で、長い年月をかけた取組みによる観光振興の事例も、これまで多く紹介され、その成功要因も論じられてきた¹⁾。これらを踏まえて、金(2008)は、観光振興には地域の基幹産業の活用より維持を優先することと、観光ニーズの変化を捉えることも必要であるとした。これらの論考を元に、観光振興に取組む上で重要な点をまとめると、住民が主体であること、地域の重要な産業を活用・維持すること、住民の生活環境の向上を目指すこと、そして、観光ニーズを見据えること、の4点が挙げられる。

以上の論考には、地方都市のまちづくりや観光地での取組み事例も含まれるが、農村地域を対象とした研究も蓄積がある。その中で曾(2010)は、安心院町のグリーンツーリズムの発展要因は組織、教育機関、行政によるものであるとした。菊池ら(2011)は、みなかみ町の「たくみの里」を事例として、その成功要因は内発的な観光振興にこだわったことであると結

1) 田村 明(1987)、平松守彦(1994)、本間義人(2007)などに事例が多く取り上げられている。

論づけた。そして、松永ら（2012）は、長野県小布施町が地域活性化の過程からその成功要因を明らかにするなかで、行政と民間の強い連携、特に2000年代の取組みが民間や NPO が中心になっていることを指摘した。これらの地域研究に対し、安藤（2012）は政策を視座に論じている。彼は、南信州地域のグリーンツーリズムは、公・民協働による内発型の地域活性化政策によって成果を上げたとする。この他の研究を含め、農村地域の観光振興の要因として上記に挙げた4点の中でも、特に菊池ら（2011）、松永ら（2012）に見るような、住民主体や内発型に着目する傾向がある²⁾。曾（2010）、安藤（2012）においても、行政の取組みや施策の経緯に着目した研究ではない。このような研究の傾向は、特に1990年代以降に行政主導の振興策が批判を浴びてきたことが一因と考えられる。したがって、特に近年の地域振興策を明らかにする観光研究が必要とされる。

本研究では、農村地域における地域活性化政策の役割を論じる。その研究対象地を広島県三次市とする。三次市は、過疎化や高齢化の課題を抱える日本の地方の典型であるが、農業の活性化政策の一貫としてワイナリーを開設し、これが観光振興の契機となった地域である。ワイナリーについては、1970年代以降のワインブームから、現在、第7次ワインブームであると言われ、ワインツーリズムも日本各地に広まりつつある。そのため、今後の観光ニーズを見据えた施設である。本研究では、まず、三次市における農業と観光の実態、および活性化政策の経緯を概観し、地域におけるワイナリーの役割を農業と観光の視点から論じる³⁾。さらに、日本のワインツーリズムについて考察を加える。

-
- 2) 他の3点も言及され、研究テーマとしては、グリーンツーリズムやエコツーリズム、体験型やまちなみ観光など、当時の観光ニーズを反映したテーマの研究が多い。
 - 3) 調査は、主に文献資料に基づくが、観光と農業の政策に関しては、三次市地域振興部観光交流課（2014年3月10日）および農政課（2014年3月24日）での聞き取りをし、メールや電話での問い合わせもした。また、「広島三次ワイナリー」では設立経緯や実態に関しての聞き取り（2014年3月25日）をした。

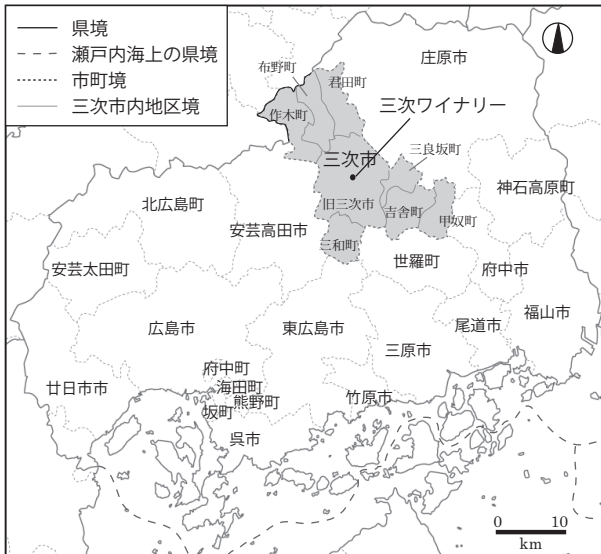
本研究は活性化政策の一貫としてのワイナリー施設を対象とするが、地域活性化関連施設は1990年代以降に市町村長や行政などによって建設が推進されてきた（小松原，2006）。このような行政主導で建設された施設は全国各地にあり，その多くが老朽化や費用対効果の課題に直面している。そのなかで，農村地域の住民の交流促進を図る公的宿泊施設が観光効果をもたらした例もある（富川，2010）。本研究の対象とするワイナリーは，それとは異なるタイプの公的施設であり，公的施設の活用方法を見直す自治体にも多くの示唆を与えるものと考えられる。

2. 三次市の農業と観光

(1) 三次市の概要と農業

三次市は，広島県の北東部に位置する県北部の中心都市である（図1）。中国山地と吉備高原の間に位置する標高150～250 mの三次盆地には，3河川が中央で合流し，江の川となって日本海に流れる。この合流地点が三次

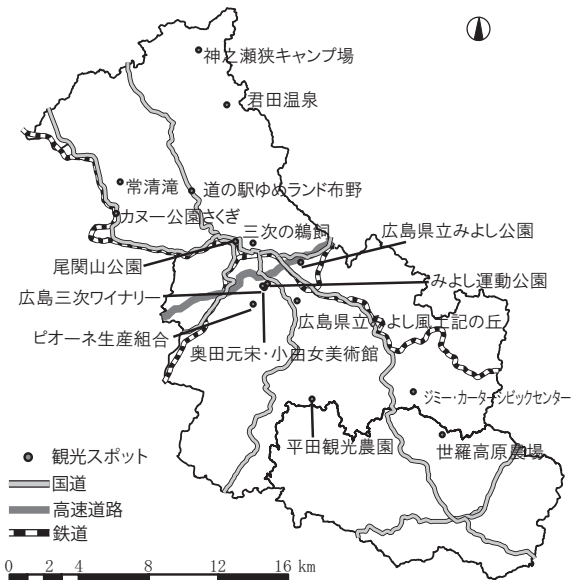
図1 広島県三次市の位置



市の中心にある。市の面積は 778 km²、森林率は約 76% である⁴⁾。年間降水量は約 1,600 mm、積雪量は多くても 30 cm 程度であるが、内陸性気候で年較差・日較差が大きく、年平均気温は 13℃ と冷涼である。特に秋季は市街地が霧で覆われる日が多いため、霧が山から見下ろす雲海、「霧の海」として観光資源に活用され、これが市の観光イメージキャラクターのモチーフにもなっている。

三次市への交通網は、国道が 5 路線と、高速道路が中国縦貫自動車道とそれに接続する中国横断自動車道尾道松江線、鉄道は JR 3 路線が通り、中国地方の中央にあって交通の要衝となっている（図 2）。大阪、下関からともに約 250 km に位置し、広島市、三原市、福山市、出雲市、松江市の各

図 2 三次市の交通網と観光スポット



4) 国土交通省資料「平成17年度の現地調査の概要」http://tochi.mlit.go.jp/wp-content/uploads/2011/02/kaiketsu_model_02.pdf (2015. 4. 19)

富川：広島県三次市の地域活性化政策によるワイナリーの役割と観光振興

都市から 50～80 km に位置する。広島からのアクセスは列車もしくは車で、また尾道、松江から車で 1 時間半前後である。松江・三次間の松江自動車道が 2013 年 3 月に開通したが、2014 年 3 月 22 日の尾道松江線全線開通後は尾道からのアクセス時間も大幅に短縮された。

三次市の人口は、2014 年 4 月現在で約 56,000 人である。2004 年に旧三次市と 4 町 3 村が合併したが、人口の約 7 割が旧三次市に集中する。過去 10 年の人口減少率は 5 % 程度であるが、高齢化や転出増加による今後の大幅な人口減少が危惧される。三次市の産業構造は、2010 年の就業者約 28,500 人のうち卸売・小売業と製造業従事者の約 4,000 人が最も多く、次いで医療・福祉、そして農業従事者が 3,000 人超である⁵⁾。農業従事者は全体の 11% を占め、農業は重要な産業であるが、2005 年から 5 年間に就業者は 14% 減少し、耕作放棄地面積は 10% 増加した。三次市では、このような人口減少と農業の対策が喫緊の課題となっている⁶⁾。

三次市の耕地面積 (5,980 ha) には、田耕地が 88% を占め、農業産出額 (約 110 億円) では米が 33% (約 37 億円) を占め (2011 年)、次に産出額が高いのは鶏卵 (約 30 億円) である。広島県全体でも、米と鶏卵は多いが、野菜の産出額が鶏卵同様に高い⁷⁾。これが、三次市では野菜に代わって果実 (約 12 億円) と乳用牛 (約 11 億円) が続く。果実は特にブドウが多く、市の結果樹面積の 62% をブドウが占め (65 ha)、収穫量の 1,060 t は、次に続くなし (145 t) やりんご (112 t) とは比較にならない量である。このように三次市のブドウ栽培が盛んであるのは、米の生産調整対策としてブドウの特産化が図られたことによる。

5) 以上、三次市「国勢調査人口」http://www.city.miyoshi.hiroshima.jp/kikaku_m/profile/toukei/toukei1.html (2015. 4. 20)

6) 農林水産省「市町村統計データ」<http://www.machimura.maff.go.jp/machi/contents/34/209/index.html> (2014. 4. 11)

7) 同上

(2) 歴史と観光資源

三次盆地は、古くから開けた地域であり、古墳の数が約3,000基に上る中国地方有数の古墳密集地である。なかでも国史跡浄楽寺・七ツ塚古墳群(176基)は三次地域を代表する古墳群である⁸⁾。また、広島県内の古墳の3分の1がこの地域に集中することから、「広島県立みよし風土記の丘」が整備された。風土記の丘は、1966年に、当時の文化庁が史跡整備と資料館の設置とそれらの公開を図ることを目的として開始した事業であり、2010年現在までに全国で17ヶ所整備されている⁹⁾。「広島県立みよし風土記の丘」は、古墳群を中心とする約30haの地域を広域的に復元した古代住居や、移築した石室があり、併設の「広島県立歴史民俗資料館」で資料や文化財が保存・公開がされている。

三次盆地の発展は、たたら製鉄と河川の水運によるが、三次市三良坂町にある白ヶ迫製鉄遺跡が確認されている最古の製鉄遺跡とされ、古墳時代後期(6世紀後半)には鉄生産が開始されたとみられる。三次盆地を含む中国山地一体は、江戸時代まで出雲国と並ぶ我が国屈指の鉄生産地であった¹⁰⁾。現在、たたら製鉄に関する観光施設は、鳥根県内に数カ所あるが、三次市には、「広島県立歴史民俗資料館」内の展示品やイベントの際の鉄づくり体験などによって文化の継承と観光資源活用がされている。

山陽と山陰を結ぶ交易の要路とされてきた江の川は、特に明治時代以降、1930年代の陸上交通の発展から水運が衰退するまで、鉄と米を中心とした内陸交通の幹線であった¹¹⁾。また、江の川流域の漁撈文化は、最上川や荒川と並ぶわが国を代表するものとして、使用・保存されてきた漁具1,000点

8) 広島県「ひろしま文化大百科」<http://www.hiroshima-bunka.jp/modules/newdb/detail.php?id=698> (2014. 4. 11)

9) 広島県立八雲立つ風土記の丘 <http://www.yakumotatu-fudokinooka.jp/fudokinookanorekisi.html> (2014. 7. 17)

10) 広島県「ひろしま文化大百科」, 上掲。

11) 国土交通省「江の川の歴史」https://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/87073/87073-1_pl.html (2014. 6. 19)

富川：広島県三次市の地域活性化政策によるワイナリーの役割と観光振興

以上が国の重要有形民俗文化財に指定されている。江の川の漁法の一つに室町時代に遡る鵜飼漁がある。現在のような小舟を使い数羽の鵜を操る舟鵜飼が盛んになったのは江戸時代以降のことであり、これを宿泊者用に公開したのが大正時代であった。鵜飼は1951年に禁止漁法となったが、観光鵜飼として現在に至っており、6月から8月の夏の3ヶ月間に催される。2013年の乗船客数は約3,000人であったが、見物客も多い¹²⁾。

江戸時代に城下町として栄えた名残として、市街地には卯建のある商家が並ぶ旧街道があり、その周辺には史跡や忠臣蔵ゆかりの古寺などの社寺もある。また、1927年に建築された洋風の建造物が、現在は市歴史民俗資料館として利用されている。これら文化財を巡る歴史的町並みも観光資源になっている。江戸時代初期の城跡がある尾関山自然公園は、桜や紅葉の名所として知られ、シーズン中は多くの客が訪れる。

この他、自然の観光資源として、君田町の神之瀬峡県立自然公園や、日本の滝百選に選定されている作木町の常清滝、他にも滝や桜の名所などがある。しかし、これら三次市の自然・人文資源は、観光客数から判断すると観光資源として十分に活用されているとは言い難い。

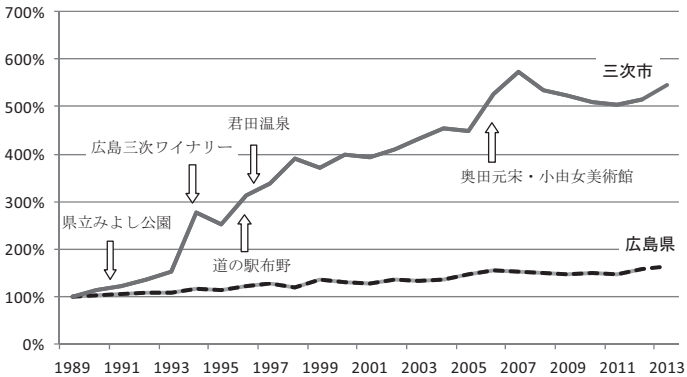
(3) 観光の発展

三次市中心街は、昭和の高度経済成長期に商店街が活気に満ちていた。1960年代はイベントなども多く催され、それを目当てにした客や春の花見客が三次に集まった。観光需要の増加に伴い、これまでの小規模旅館に加えて国民宿舎が1966年に開設され、1975年に三次市で初めてホテルが開業した。

三次市の観光客数は、1989年の542,000人から順調に推移し、24年後の2013年に295万人になった。図3は、三次市の観光客数の伸び率を広島県とで比較したものである。ここでは、1989年の三次市の観光客数と広島県全

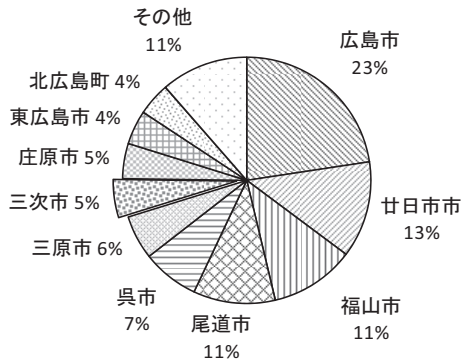
12) 中国新聞(ウェブ版)2013/08/29 http://newschina.jchere.com/newsdetailid-2782096.htm#.U2cie3ZFu_

図 3 三次市と広島県の観光客数伸び率の推移比較および主な観光施設の開業時期



『平成24年広島県観光統計観光客数の動向』および『三次市勢要覧資料編』より作成。

図 4 広島県の観光客数の市町別割合 (2013年)



広島県『平成24〔2012〕年広島県観光客数の動向』より作成。

体の観光客数 (38,581,000人) を100として、24年後の2013年までの三次市の観光客数 (295万人) と広島県の観光客数 (6,109万人) の伸び率の推移を表した。広島県の伸び率163%に対し、三次市は544%であり、三次市の観光の飛躍的な伸長が見て取れる。

また、図4は、2013年の広島県全体の観光客数を市町別に占める割合で示したものである。県内では広島市の観光客数が最も多く、県全体の23%を占め、続いて宮島のある廿日市市に13%、福山市と尾道市に11%、呉市に7%、三原市に6%と、瀬戸内海沿岸の市に71%を占めるなかで、内陸に位置する三次市は、庄原市と並び5%である。この割合は1989年に遡ると、上位6市が77%を占め、内陸の庄原市は3%、そして三次市は僅か1%であった。つまり、観光客が瀬戸内海沿岸の市に多いながらも、内陸地方への分散傾向にあり、中でも三次市の増加は突出していると言える。

一方、2013年の三次市の宿泊者の割合は、観光客数全体の3.4%にとどまり、県全体の平均12.8%を大きく下回る。これは、2004年に8%であったことから、過去10年間に大幅に減少していることが分かる。また、一人あたりの観光消費額も、三次市が1,660円であり、県全体の平均5,860円より大きく下回る。ただし、これらの県平均は、広島市の宿泊率と消費額(33.9%と15,813円)が突出して高いために全体を引き上げている¹³⁾。しかし、何れにしても三次市の宿泊率と消費額の低さは課題と言える。

日帰り観光客数が大幅に伸びた背景には、統計の対象となる観光施設の増加がある。観光施設は、1979年の「県立みよし風土記の丘・歴史民俗資料館」の開設後、1990年代以降に開設が相次いだ。図3には、1989年以降の三次市における主な観光施設の開設時期を示している。まず、1991年に「広島県立みよし公園」が開園した。この公園は、プールやテニスコート、アリーナなどのスポーツ施設を備え、2001年に全面開園となった。そして、1994年に「広島三次ワイナリー」が開業すると、三次市の観光客数は前年比45%増と飛躍的に伸び、これが市の観光発展の契機となった。ワイナリーは、工場訪問としてよりも、多目的な利用ができる施設になっている。1996年には、「道の駅ゆめランド布野」が開業し、農産物や土産品の買い物客が増えた。1997年は、君田に温泉施設が開業したことで日帰り入浴者が

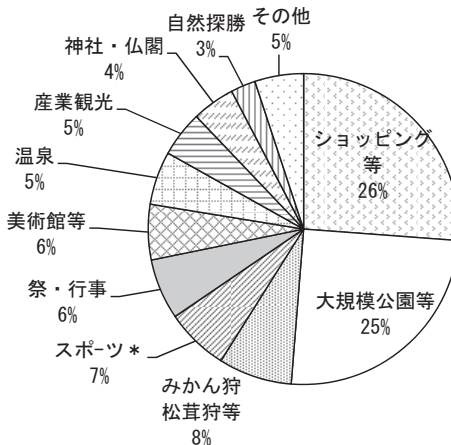
13) 広島市の宿泊の割合は2004年は35%であった(広島県『平成6年広島県観光客数の動向』より)。

新たに観光客として加わった。ここには宿泊施設も備わっているが、2011年の増築後も客室数は12のみである。そして、2006年に床面積約 5,000 m²、地上 3 階建ての「奥田元宋・小由女美術館」が開館した。

この他にも各地に公園やレジャー施設が整備されてきた。旧三次市以外の各町では、これらを資源として観光振興を図ってきた。君田町では温泉、布野町では道の駅、作木町では常清滝に加えてカヌー公園、三良坂町ではダム湖周辺施設、吉舎町では高原のアウトドア施設、そして、甲奴町はジミー・カーターの関連施設を中心に据えた観光の振興策が推進されてきた。一方で旧三次市では、敷地面積 28 ha の「三次市みよし運動公園」の整備が進められていた。この運動公園には、陸上競技場や野球場、プールなどの施設やこどもの大型遊具を備えた「みよしあそびの王国」があり、ワイナリーと美術館にも近接する。

三次市の観光客数の増加は、観光施設が増えていったためであるが、

図 5 三次市の目的別観光客数 (2013年)



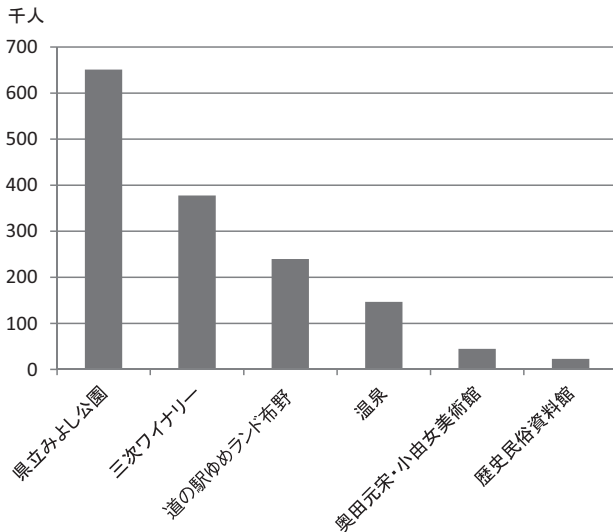
*スポーツは、ハイキング・登山キャンプ、スキー、サイクリングを除く

『平成24〔2012〕年広島県観光統計観光客数の動向』より作成。

2013年の三次市の目的別観光客数の割合（図5）を見ると、最も多くを占めるのがショッピングの26%（約76万人）である。ここには、「広島三次ワイナリー」（約44万人）と「道の駅ゆめランド布野」（約24万人）が含まれる。次の「大規模公園等」の25%（約73万人）には、「県立みよし公園」の利用者が多くを占める（図6）。「みかん狩・松茸狩等」は、約22万人の利用者がいるが、この多くは「平田観光農園」の利用者である。「平田観光農園」は、15 haの敷地に15種類の果樹や野菜があり、年間を通して果物狩りができる全国でも珍しい観光農園である。農産物加工と加工品の販売など、6次産業化を目指しながら着実に観光効果を上げてきている。尚、この図では「ハイキング・登山・キャンプ」と「釣など」は1%に満たないため、「その他」に含めた。

以上のように、観光客数が最も多い三次市の施設は、「県立みよし公園」であるが（図6）、ここを利用する市外客は、スポーツ大会やイベントの際

図6 主な観光施設の客数（2012年）



『平成24〔2012〕年広島県観光統計観光客数の動向』および聞き取りにより作成。

に限られ、通常は市民による利用が多くを占めると考えられる。また、日帰り客が多くを占める温泉施設も、同様に市内客が多くを占める。このため三次市の観光入込客数は、市外（県内）が全体の35%、県外客は14%でしかない。これに対し、「広島三次ワイナリー」では、市外からが35%、県外からが36%と、入込客数は全体の71%である。

三次市の観光客数増加の契機となった「広島三次ワイナリー」は、現在でも最も重要な観光施設となっているが、それ以前に三次市の重要な産業であるブドウ栽培に大きな効果が期待されていた。

3. 地域活性化政策とワイナリー

(1) ブドウ栽培からワイナリーの開設

「広島三次ワイナリー」設立の背景には、ブドウ栽培の際に出る大量の規格外ブドウの活用があった。

かつて、ブドウ農家は市の南部に3軒あったが、米の生産調整対策として1971年に新たに100haの大規模ブドウ団地の開発計画が立てられた。市は、高品質で新品種であったピオーネを中心に「ブドウ王国」や「葡萄の里づくり」を目指すことにし、1973年に山林買収や道路の着工が始まった。翌1974年には「三次ピオーネ生産組合」が設立され、会社員や銀行員、酪農家など、果樹栽培未経験者24名の組合員によって畑地造成からピオーネの植栽に至った。しかし、栽培研究と商品化に時間を要し、2年後の初出荷までに脱退する組合員もいた。それが、1982年に組合が新たな体制を確立し、その後は種なしのニューピオーネの開発や加温ハウスの採用などによって品質・収量の向上が進展した。その結果、複数の農業賞を受賞するまでになり、現在のような「三次ピオーネ」ブランドの確立に至った。「三次ピオーネ生産組合」の農園は市街地の南およそ5kmの標高約320mの丘陵地に広がり、栽培面積35.35haに数種類のブドウが栽培されている(図2)。近年の出荷量はピオーネを中心として年間約600tになる。

農園での生産量が増えるに伴い、規格外ブドウも増加した。また、三次

富川：広島県三次市の地域活性化政策によるワイナリーの役割と観光振興

市には1972年7月の豪雨災害に見舞われた経験がある。災害時に備えたブドウの加工品も開発する必要があった。そこで、これまでのジュースやジャムに加えて、当時の福岡義登市長がワインの生産を提案した。その結果、市の政策推進による「ワイン工場建設委員会」が1987年に発足し、1991年に第三セクターによる「株式会社広島三次ワイナリー」が設立され、1994年にワイナリー開業に至った。

「広島三次ワイナリー」は市街地から4 km 程度南に位置するが、中国自動車道の三次インターからは2 km の距離にある(図2)。ワイナリーの施設には、瓶詰めやラベル張りの様子が見られる工場、ワインセラー、ワインとジュースの試飲コーナーがあるだけでなく、地元の特産品売り場を備え、地元の広島牛をメインにしたバーベキューレストラン、喫茶店、文化財展示施設も併設されている。

この地域は市が推進する「みよし農村公園」の整備事業の地区にあたる。ワイナリーに文化展示施設が併設されているのもそのためであり、余暇・観光施設の他、周辺には病院や農林業団地、工業団地も整備されている。ワイナリーが、これらの利用者の立ち寄りスポットとして好立地にあるのは、市の活性化政策に基づくものである。

(2) 農業・農村地域活性化政策

三次市は、1961年の農業基本法制定当時から稲作依存型農業から畜産、果樹を導入した複合型農業経営を農政の柱としてきた¹⁴⁾。前述した1972年の「三次ピオーネ生産組合」の設立はこの政策の一貫であったが、その後1986年に高収益農業の確立と農村住環境整備に向けた施策目標が立てられた。そしてワイナリーは、1990年以降の「新三次市総合開発計画」のもと、地域づくり政策としての「みよし農村公園」整備事業に組み込まれた。この事業は、高付加価値農業の確立、雇用拡大と定住促進、農村文化の伝承

14) (財)広島県農業開発公社(2001), p.2 参照。

や創造、といった3側面からの地域活性化を図るものであり、1991年の「株式会社広島三次ワイナリー」の設立もこの事業の一貫とされた。「みよし農村公園」は、1992年から6年間の事業計画で、全体面積約3haにワイナリーの他、運動場、体験館、芝生広場、駐車場などが整備された。計画当時は、公園の周辺にピオーネのブドウ農園、果樹園や牧草地、ゴルフ場、さらにその周辺に肉用牛の肥育施設や農畜産物の加工施設、また観光農園などが位置し、農業・農村地域活性化の中心に公園が据えられていた¹⁵⁾。

2001年、三次市のブドウの粗生産額は9億1,000万円と、米の粗生産額18億9,000万円の半数近くに達した¹⁶⁾。また、ワイナリーは、当初目標の来場者数12万人が1994年度は39万人となり、ワイン出荷本数は当初目標の14万本が1998年度に30万本を超えた¹⁷⁾。ワイナリーを核とした「みよし農村公園」は、2001年に見直され、さらなる農産物資源の活用や経済効果を図るため滞在型市民農園やレクリエーション施設整備などの構想もあったが、レクリエーション施設に代わって、2006年に美術・芸術文化の振興拠点としての役割を担う美術館が開設した。しかし、農業を活かした観光振興の理念は、2012年の広島県の過疎地域支事業「三次市未来創造計画」に引き継がれた¹⁸⁾。そして2014年、農林畜産業等の生産力・販売力の強化を目的とした「三次市農業交流連携拠点施設整備基本計画」が出された。施設相互間の相乗効果をさらに高めるものとして、農産物の販売、加工、飲食、また観光情報発信などの機能をもつ施設が計画され、ワイナリーからブドウ農園までの観光客の誘導も図られる。

これによって、観光者の回遊性が高まり、滞在時間の延長と消費額の増大が期待されるが、これは、「広島三次ワイナリー」が既に集客施設として機能していることが前提となっている。

15) 株式会社広島三次ワイナリー (1994), p. 5 参照。

16) 株式会社広島三次ワイナリー (2002), p. 3 参照。

17) (財)広島県農業開発公社 (2001), p. 16 参照。

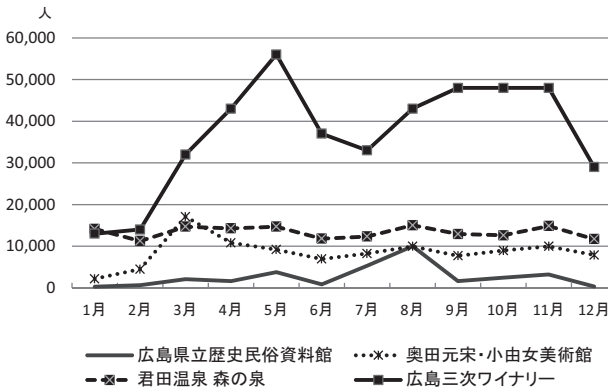
18) 広島県地域政策局過疎・地域振興課 (2012) 参照。

(3) 「広島三次ワイナリー」の実態とワインツーリズム

「広島三次ワイナリー」の客数は、ピーク時（2006年）の50万人超から、近年は40万人前後で推移している。来訪者約44万人（2013年）の旅行形態は、79%が一般客、21%が団体客である¹⁹⁾。一般客は、家族連れも多く、殆どが自家用車で訪れ、団体バスは年間2,000台から3,000台になる。消費額は、近年増加傾向にあり、2013年は一人当たり1,883円と、市全体の平均消費額（1,660円）を上回る。この統計は売店で購入者数と販売額を元に行っているため、バーベキューなどの食事代は消費額に含まれていない。

「広島三次ワイナリー」の客は、三次市の他の観光施設に比較すると月別の変動が大きく、特に春と秋に多い（図7）。最も多い5月は、約5万6,000人と全体の約13%を占める。一方でワイナリーの集積地である山梨県の「勝沼ブドウ郷周辺エリア」を参考にみると、年間140万人の観光客が5月に占める割合は約6%しかなく、9月に約17%、10月に約16%と、秋に集中する²⁰⁾。このように、通常、ワイナリーにはワインのシーズンである

図7 有料観光施設と三次ワイナリーの月別利用者数



『平成24〔2012〕年広島県観光統計観光客数の動向』より作成。

19) 広島県「広島県観光客数の動向」参照。

20) 山梨県『平成25年山梨県観光入込客統計調査報告書』https://www.pref.yamanashi.jp/kankou-k/documents/h25kankouirikomitoukei_houkokusyo2.pdf ↗

秋に客が集中する傾向がある。「広島三次ワイナリー」に春の来訪者多いのは、花農園が多くある世羅町の観光者がワイナリーに寄るためである。なかでも「広島三次ワイナリー」から 32 km にある「世羅高原農場」は 8 ha の広大な花畑を有し、多い日で一日 1 万人超の来客がある (図 2)²¹⁾。世羅町は果実を資源とした観光も盛んであり、梨やブドウ、りんご狩りなどを目的とした客が秋に多い。また、三次市内の「平田観光農園」の一般客、団体客ともに「広島三次ワイナリー」を経由することが多い。このようにワイナリーは、車でのアクセスがよいことから立ち寄り地としての役割も担っている。さらに、ワイナリーの周辺施設からは、美術館の利用者年間 7 万人のうち 3 万人が、運動公園の利用者 16 万人のうち 1 万人が、そして病院からは 1 万人が、年間 40 万人のワイナリーの客に含まれるとみられる²²⁾。

ワイナリーの客の多くは、無料のワインとジュースを試飲する。1 本約 1 万円の貴腐ワインを始め、比較的高価なワインの有料試飲の客は週末に 70 人程度いる。170 席のバーベキューレストランは、シーズン中は満席になる日が多い。これらの客は殆どが土産品の購入もする。しかし、工場の稼働は年間 50 日程度でしかなく、稼働中の工場を見学する機会は少ない。また、「広島三次ワイナリー」は専用の圃場を有するが、ワイナリーから 3 km 程の三次ピオーネのブドウ園に隣接した山地にあり、高速道路のインターチェンジからも反対方向にあるため、果樹園観光としての利用は殆どされていない。観光客の満足度調査によると、「広島三次ワイナリー」に満足度が高いのは、アクセスの良さと特産品や土産品の購入であることが示されており、それに反して観光地点としての魅力度が高くない²³⁾。

以上のように、「広島三次ワイナリー」は、周辺観光の立ち寄り地として

21) (2015. 4. 20)

21) 世羅高原農場吉原代表への聞き取りによる (2014年 3 月 12 日)。

22) 三次市 (2014), p. 9 参照。

23) 広島県商工労働局観光課 (2012), p. 18 参照。

利用され、市の集客の拠点として機能している実態が確認できた。その一方で、ワインツーリズムとしての集客力が弱いことも実態である。

ワインツーリズムは、「訪問者がワイン・テイastingや（もしくは）ワインの地域における体験が主な動機的要因になってブドウ農園、ワイナリー、ワイン祭りやワインショーを訪れることである」（C. M. Hall, 2002）。これに示されるように、ワインツーリズムは、ワイナリー訪問が主たる動機であることが基本である。また、動機に基づかず、観光行動のみを基準にした概念も見られる。「ワインツーリズムおよびワイナリー巡りは、地域のワイナリーやブドウ畑を訪れ、その土地の自然、文化、歴史、暮らしに触れ、作り手や地元の人々と交流し、ワインやその土地の料理を味わう旅行のことであり、ワインを「飲み」、それに合う地元料理を「食べる」、生産現場であるブドウ畑やワイナリーを「見学」し、ワインを「買う」旅」ともされる（安田，2013）。これらの概念にみる観光行動の基本は、ワイナリーのみならず、ブドウ畑やブドウを特徴とする地域資源を楽しむことである。さらに、ワインやブドウを活かしたツーリズムの消費額は、1人平均5,000円台になるとされる（安田，2013）。これに比較して「広島三次ワイナリー」の消費額（1,883円）が低いのは、レストランでの消費額が含まれていないためのみならず、消費額にワイン以外の物産品が多くを占めるためと推察される。したがって「広島三次ワイナリー」は、ワインツーリズムの基本要素を十分に満たしているとは言い難いが、それにもかかわらず、施設に十分な集客を誇っているのが実態である。また、このような観光行動は、ワインツーリズムとしてよりも、むしろ土産品購入や立寄り地としての「道の駅」の利用に近く、ヨーロッパなどで盛んなワインツーリズムとは全く異なるワイナリーの機能を「広島三次ワイナリー」が提示していると言える。

道の駅のような観光施設であれば、利用者の増加が直接、経済効果に繋がる。しかし、「広島三次ワイナリー」の支配人である山縣氏は、現在の来訪者数40万人前後が収容人数の点からも適当であると認識している。今後、

客数の増加を図るのであれば、冬季の対策であり、さらに体験型観光や宿泊の促進、情報発信など広域連携によって周辺地域全体への波及効果が高めることが課題であるとする。つまり、「広島三次ワイナリー」は施設への来客数や消費額、さらには市内に限った観光効果を図っているのではなく、より広域的で長期的な視野で観光振興を目指していることが明らかである。

4. お わ り に

過疎化と高齢化、農業衰退の課題を抱える広島県三次市は、その対策としてブドウの特産化が図られた結果、現在は「三次ピオーネ」のブランドで知られるようになった。「広島三次ワイナリー」は、農業の面では、農業基盤の強化が目的とされ、ブドウの市場開発や知名度の向上、また現在市が目指す6次産業化の中心的役割を担っている。そして、観光の面では、ワイナリーの開設が観光振興の契機となり、観光入り込み客数、消費額ともに大きな成果を上げ、さらに市の観光交流の拠点として重要な役割を担う。このような市の活性化の中心的役割を担う「広島三次ワイナリー」は、農業政策に始まった市の政策の結果であり、さらに今後の施策によって地域の交流拠点としての役割が強化され、今後も、単にワイナリーへの来訪者数や消費額の増大を目指すのではなく、広域的で長期的な活性化が期待される。

「広島三次ワイナリー」は、ワインツーリズムとしてよりも、むしろ「道の駅」のようなワイナリーの機能を提示しているが、何れにしても「ワイン」そのものの基準が欧米とは異なる日本においては、「ワイナリー」や「ワインレストラン」に訪れる動機や観光行動も当然異なってくる。そのため、日本ではワインを観光資源の中心に据えたツーリズムではなく、他の観光形態、例えば農村観光や文化観光などの付加価値としてワインやワイナリーを活かすことが、より現実的であると考えられる。

しかしながら、ワイナリーは今後の観光発展が期待できる観光対象であ

富川：広島県三次市の地域活性化政策によるワイナリーの役割と観光振興

るため、「広島三次ワイナリー」自体の観光魅力度が低いことは、地域の観光振興のためにも改善の余地がある。そのため、ワインとブドウのブランド強化を図る取組みが求められる。また、ブドウ農園の観光利用も期待され、広大な丘陵地に一面に広がる三次のブドウ畑の景観は、日本最大のブドウ生産地である山梨県甲府市付近の光景とは全く異なり、観光の魅力度を大きく高めるものと考えられる。さらに、ワイナリーによる回遊性の促進として、観光情報の発信の場としての機能強化に加え、ワインを好む中高年層向けの史跡散策路や雲海スポット、鶺鴒を学ぶ観光など、旅行者層別の観光ニーズを見据えたルート設定などによって市街地への誘導が可能となろう。最後に、広域観光の促進に関しては、中国山地の中心都市である三次市が、市や県の境界を超えた広域連携に取り組むこと、特に地域独自のテーマを冠した広域観光振興策の推進が望まれる。このように一施設を中心とした地域振興、あるいは観光振興への取組みには、多くの可能性があり、それが公的施設であるからこそ可能と言える。

謝辞：三次市地域振興部観光交流課元課長の岡本氏、および「広島三次ワイナリー」の山縣支配人には、調査にあたり快くお応え頂きましたこと、心より感謝申し上げます。

参 考 文 献

- 安藤隆一（2012）「地域活性化の政策において、内発的發展論が果たす役割に関する考察——長野県飯田市及び下伊那郡における事例を中心に——」、『同志社政策科学研究』, 13(2), pp. 127-138
- 菊地俊夫, 岡野祐弥, 北島彩子, 窪村麻里子, 小池拓矢, 園田健太郎, 中村聡美, 真栄田晃, 鈴木晃志郎（2011）「群馬県みなかみ町旧新治村における「たくみの里」の発展と地域観光への貢献」、『観光科学研究』, 4, pp. 129-147
- 金 徳謙（2008）「第一章 観光認識と地域振興」, 香川大学経済学部ツーリズム研究会『新しい観光の可能性』, 美巧社, pp. 1-31
- 小松原尚（2006）「農村における農業と観光に関する考察」、『奈良県立大学研究季報』, 17(1), pp. 1-13
- 曾 宇良（2010）「安心院町におけるグリーンツーリズムの展開とその地域の意義に

- 関する研究』、『観光研究』, Vol. 22, No. 1, pp. 25-30
- 田村 明 (1987) 『まちづくりの発想』, 岩波新書
- 富川久美子 (2010) 「農村地域における公的宿泊施設の役割と観光効果」, 『修道商学』, 50(2), pp. 151-171
- 平松守彦 (1994) 『地方からの発想』, 岩波新書
- 本間義人 (2007) 『地域再生の条件』, 岩波新書
- 松永 剛, 水野博之 (2012) 「長野県小布施町の地域活性化手法の分析による地域活性化成功モデルの導出」, 『経営情報学会全国研究発表大会要旨集』, 2012f (0), pp. 151-154
- 安田亘宏 (2013) 『フードツーリズム』, 古今書院
- Hall, Michael C. (2009), *Wine Tourism around the World*, Routledge, p. 3

参 考 資 料

- 株式会社広島三次ワイナリー (1994) 『みよし農村公園広島三次ワイナリー竣工記念』
- 株式会社広島三次ワイナリー (2002) 『三次ワイナリー・農村公園の概要』
- 菁文社 (2000) 『げいびグラフ』 第84号, pp. 2-7
- (財) 広島県農業開発公社 (2001) 『みよし農村公園 (広島三次ワイナリー) を核とした三次市都市農村交流の考え方』
- 広島県 『広島県観光客数の動向』 (各年版) <http://www.pref.hiroshima.lg.jp/site/toukei/doukou-index.html> (2015. 4. 20)
- 広島県地域政策局過疎・地域振興課 (2012) 『三次市未来創造計画の概要』
- 広島県商工労働局観光課 (2012) 『共通基準による「全国観光入込客統計」(H23. 1月~12月) 調査結果報告書』
- 三次市 (2014) 『三次市農業交流連携拠点施設整備基本計画』
- 三次市 「魅力たっぷり広島県三次市」 <http://www.kankou-miyoshi.jp> (2014. 4. 11)

Summary

Roles of a Winery and Tourism Development
through the Regional Policy in Miyoshi city,
Hiroshima

Kumiko Tomikawa

Major tourism studies on development of the rural areas are focused on activities of the local people as a success factor. The author approached to clarify the developing process of tourism by focusing on the regional policy. Miyoshi city, Hiroshima opened a winery for the purpose of the developing grape industry, which led to the development of tourism. The winery plays a central role in activating agriculture and tourists' flow in the region. However, this tourism form of winery is far different from the 'wine tourism' in Europe. The winery in Miyoshi city presents a possibility of Japanese style wine tourism, as the function of a winery is similar to a 'road-side station (Michino-eki)'.

Keywords: Regional Policy, Rural Area, Winery, Wine Tourism